
トールの直行

タケノコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トールの直行

【Nコード】

N9467Y

【作者名】

タケノコ

【あらすじ】

トールとカルト、二人の主人公が織り成す異世界ものファンタジー。毎日更新予定。

1話

神人、それはこの世界アムステルスで最も強大な力を持つ二つの種族を指す。一つは人型の赤い毛の虎「赤虎」。もう一つは人型の黄色い鱗を持つ龍「黄龍」。

この二つの種族は常にお互いを敵視し闘争を繰り返してきた。それは永年変わらないだろう。この争いに終止符をうつのは全身黄金色の毛を持つ赤虎である。

十

城内の広々としたホールは騒然となった。至る所から喧騒が聞こえる。人々が恐れ慌て逃げ惑っているのだ。

豪華なテーブルや椅子、調度品や豪華な食べ物が入り交じり散乱しドレスアップした男女は遁走する。豪華な金色の絨毯は食材の汁で偏食している所までである。希代の怪物アグマは鉄製のハンマーでしばいても平然としてそんな分厚い窓を突き破り城に侵入してきた。彼は人型で全身緑色の肌をしていて額からは白い一本の角が生えている。服は着ていないし体格も大きい。

アグマの視線は真つすぐに中肉中背でとげとげの赤い髪をし赤い瞳のトールを睨み据えている。激しい殺気を全身からほとばしながら。ずんずん早足で進むアグマ。険のある表情をしている。トールは城に招かれたクラトに連れられてこのパーティー会場に来ていたのだ。モンスターの総称はノルテ。ノルテの中でも強大な力を持つのが人型だ。その中でも危険度が非常に高い一人がアグマだった。

2話

アグマは慌てる賓客達を無視しながら憤怒な表情で述べた。

「邪魔さえしなければお前達にはなにもせん」

アグマは遮蔽物となった立派な椅子を蹴り飛ばしテーブルは腕で投げ飛ばしながら歩度を上げ歩く。突出したノルテである彼は立ち向かってくる槍を持った兵士達を手刀で切り殺していく。

ある者は首を切断され、またある者は胸を貫かれ黄泉の客へと変貌を遂げていく。兵士達の身につけている鎧等は布切れの如く裂け、破壊されていた。恐怖で足が竦み上がり動けなくなったトールは尻餅ついている。

彼は恐怖から声すら出ない。アグマは乱入してくる兵士達をあしらいつつ着実にトールに接近してきていた。トールの傍らにはスミレとカルトが居る。スミレは肩までの黒髪、陶器のような白い肌に大きな瞳を持った美少女だ。そんな彼女と並んで立つのがカルトである。彼は整った容貌で銀髪を背中辺りまで伸ばしゴムで結っている美少年である。

カルトとスミレが一緒にいるとまるで絵画を見ているようだ。二人共トールを引っ張ったり抱き起こそうとしている。しかし余り猶予は無い。子供三人にとっては凄まじい脅威となる怪物が近づきつつあるのだ。

彼等を庇うように前に立つボサボサの金髪に青い瞳、少し小しわのある顔のクラト・ローバイスは腰にはいた剣を抜いた。

3話

悲鳴や叫び声がこだまする大型のホール。そこではなだれ込んで来た兵士達と逃走する賓客や王族、貴族達で溢れていた。アグマは緑色の肌の顔に憎しみを表しながら

「邪魔だ！」

アグマは鎧を着込んだ歩兵三人を一瞬で血祭りにあげた。一人の陸兵の槍がアグマの肩に刺さる。

しかしアグマは平然とその槍を引き抜き二つにへし折った。それからも一人、二人、十人、三十人と精兵を殺戮した。もう戦おうとする衛兵は居ない。

圧倒的な強さを目の当たりにして敗走してしまったのだ。

「お前も邪魔だてするのか？ その赤虎の臭いがする小僧を差し出せ。それなら命は助けてやろう」

アグマは緑色の口角を上げシニカルに微かに笑いながら喋った。それに両手で剣を構えるクラトは答える。

「教え子を守るのは先生である僕の責務だ。その要求は飲めない」

クラトの後方でトールは赤髪を小刻みに揺らし震えている。アグマの目はトールを見据えている。トールはまるで蛇に睨まれ蛙のように身動きがとれない。

彼は十何年という短い人生の中でこの瞬間、瞬間に最も恐怖を感じ取っていた。生きた心地がしない。頼りになるのは孤児院から引き取ってくれた恩師のクラトだけだ。

4話

アグマはゾツとするような笑みを零し

「そんなに死にたいなら……屠つてやろう！」

重心をやや前にし疾駆するアグマ。彼からはまがましい気配が発散されていた。それに対抗する為にクラトはあれ放題の金髪を靡かせ剣を下段に構えながら駆け出した。そして魔腕を発動させる。

魔腕とは筋肉を増強し力を上げる技だ。彼の腕が膨らむ。クラトは縦切りを繰り返すがアグマはそれを右手で握った。クラトの剣を赤い血が伝う。アグマは己の優位を確信しツールを人差し指で指差しながら言葉を紡いだ。

「お前の力量は理解した。まだ伸びしろもある。その赤髪のカギを差し出せ。これは要求では無い、命令だ」

クラトは歴戦の猛者だ。相手の力量を理解できないほど愚かではない。しかし逃げるわけにもいかなかった。

自分にとって最も大切なものをみすみす失うのは耐えられない。彼は教え子のためなら命を捨てる覚悟があった。死んでも守りきるとクラトは心の中で呟いた。彼にアグマの強力な圧力が加わり顔中から汗を流す。アグマはノルテの中で自分が最強だと自負していた。多岐に渡る理由から同族と死闘を展開したこともあった。しかし一度も敗北をきつすることは無かった。全て圧勝で面白みに欠けているとアグマは内心つまらなく思っている。

5話

クラトとアグマはひとしきり睥睨しあった。お互いひくつもりない。激突は避けられないようだ。これから命を賭けた死闘が繰り広げられる。敗北はすなわち死だ。そのうえクラトが負けるとトールの命の灯もあえなく消えてしまう。

教え子のため敗戦が色濃い勝負に打って出る。少なくともこの強靱なノルテを逃走かあるいは深手を負けさせなければならぬと頭で考えるクラト。クラトは剣に力を込め述べた。

「魔腕十割！」

そう発した者の腕が元のサイズの二倍ぐらいに膨れ上がる。彼の腕の部分の服が引きちぎれた。クラトは全力を挙げアグマに仕掛けた。

クラトの剣がアグマの緑色の指を切断し自由になる。アグマは顔をしかめた。ノルテにも痛みはあるようだ。美少年のカルトはそれを見て安心した表情をした。

勝てると思ったのだろう。クラトは剣を縦に振るう。アグマはそれを再生させた右手で防ぐ。重い一撃のためアグマの足が石の床に食い込む程だ。彼は楽しそうに笑っていた。バトルに喜びを感じているのかもしれない。

幾度もの戦いで洗練されたアグマは実力でクラトを上回っていた。そのため余裕のある尊大な態度を崩さない。クラトは現状を打破出来る手段を思案する。

6話

しかしアグマは冷静だった。次々にクラトが繰り出す攻撃を防ぎかわす。アグマは人を凍りつかすような恐ろしい形相をしている。今までも何十、何百という強敵を鬼籍に入らしてきたことだろう。

彼の宿敵になりえる豪傑や剛の者は皆無だった。それほどまでにアグマは歴戦の勇士達より実力が軽く抜きん出ている。

そんな強豪に狙われトールは不運だ。彼は動揺を取り繕おうと躍りになっていた。トールは自分がこの場に居てはクラト先生の足手まといになってしまうのではないかと危惧していたのだ。

しかし彼の足は石のように重く、しかも痙攣し動けない。スミレとカルトはトールを地面に引きずりながらクラトとアグマから距離をとった。激戦に巻き込まれたら一たまりもないだろう。

「なぜトールを狙う。目的はなんだ？」

クラトの詰問にアグマは憤怒の表情を顔に浮かべると

「ルナス姫の敵討ちだ。俺の最愛の人だった……。全て赤虎が悪い！」

アグマは憤慨しキツとトールを睨みつける。そのトールを正視する目には怒りと悔しみが含まれていた。アグマとトールの視線が交わる。

トールは慌てて目を逸らした。彼の背筋を悪寒が走った。アグマは上段蹴りを相対する者にしかけた。それをクラトはしゃがんでかわす。二人は激闘を繰り広げる。

7話

十二歳のトールは背筋が寒くなった。こんな化け物級のノルテに狙われるなんて。生きた心地がしなかった。先生は勝てるだろうか。トールは不安になった。アグマの発言やそぶりから僕を殺すつもりだろうとトールは察していた。

彼はクラトに色々教わりながら冒険をしてきたが今まで出会ったノルテの中では最強に位置づけられる力をアグマは持っているとは断定出来た。なにをしたならそこまで強大な力を得られるのだろう。尋常じゃない努力か、あるいは天賦の才か。

クラトとアグマの対決は十二歳の子供三人（トール、スミレ、カルト）にとって神々の死闘のように思えた。両者共卓越した実力を備えている。力の差は開きがあるが。

クラトとアグマは城にある広いホールでしのぎをけずっている。

もうこの場所にはトール達三人とクラトとアグマしか居ない。

皆退散してしまったのだ。クラトとアグマは攻防を展開させていた。押されているのはクラト。彼の強力な一撃をすんでのところで避けるアグマ。強靱な肉体を持つアグマはクラトの攻めを子犬とじやれているかのように対応する。アグマが反撃に転ずる。

「グワ！」

クラトの脇腹をアグマの手刀が切った。唸るクラト。彼の茶色の服に血液が染み込む。

8話

「お前の攻防のパターンはおおむね理解した。最後の忠告だ……その赤い髪の子供を渡せ！」

クラトは右手に剣を持ち左手で脇腹を押さえながら苦しそうに笑い

「それは出来ない……」

「なぜだ？」

アグマの質問にクラトは

「彼等は僕にとって最愛の存在だ……ク！ ……彼等より先に死ぬ気は無い！」

アグマは僅かに俯き苦笑を漏らした。クラトに対峙する者は尋ねる。

「お前の名は？」

「僕はクラトだ……グッ！ ……」

クラトは両手で剣を持ちアグマに迫る。血がクラトの脇腹から垂れ重傷であることは一目瞭然なのにクラトは諦めずアグマに立ち向かう。

「先生！僕は死んでもいい！だから無理しないでください！」

トールの涙声に顔中に汗をかいたクラトはトール、スマレ、カルトの順に一瞥すると

「トール、君は優しい子だ。スマレ、君は太陽のように明るい子だ。カルト、君は人の気持ちが分かる子だ……グクッ！……僕達は血は繋がっていないが孤児院から君達を引き取って以来自分の子供のように思っているよ……それじゃあ、さよならだ……」

アグマは右腕を一閃させた。クラトはそれをかわしきれずに頬を切られた。頬から血が滴る。クラトは剣を振り上げ

「ヒートブレイク！」

9 話

クラトの放った技ヒートブレイクは自らの命を捨て何倍にも威力を上げる必殺技だ。その斬撃は一直線にアグマに襲い掛かる。

アグマに相対する者は自分が最も大切にする教え子達のために命を放り捨てた。僅かだがアグマに対し勝算はある。例えば自分が死んでしまっても最愛の者達を守れば本望だとクラトは心底思った。

彼の繰り出した強力なその一撃は触れたもの全てを滅ぼす程だ。

クラトの剣から白いまばゆい光が壁のタペストリーや天井のシャンデリア、調度品やツール達全部を包みこむ。全てに光の帳がおりた。ツール達はクラトからヒートブレイクの説明を受けていた。この技を使う時は君達と別離の時だと。君達三人を心の底から愛している……そうクラトは呟いた。ツール達は先生が死んでしまうと悟り涙を流しながら異口同音に

「……先生!!」「……」

一際白くまばゆい光が辺りを埋めた。その後待っていたのは森閑だった。ツール達三人は涙を目元に溜めながら意識を失う。それから数時間後気絶していたツール達は兵士達に発見され救助されることになる。幸い彼らはどこも負傷していなかった。

しかしクラトとアグマの姿はどこにも無い。そのため生死は定かではなかった。クラトとアグマの最後に激闘した場所には巨大なクレーターが出来ている。

10話

クラトとアグマの戦いがあって以来五年の年月が流れた。中肉中背でとげとげ髪の赤髪に赤い瞳のトールはキノコ兵士の槍による一撃をかわした。

ここは草木が生い茂った森の中。危なかった。すんでのところだった。トールの小便が一瞬途切れ、また放尿が始まる。

「うわっ！ ちょっと止めて！ 今は戦えないから！」

トールはちょうど木陰で小便をしている最中にキノコ兵士に襲われたのだ。そのモンスター、キノコ兵士は赤い肌をしていてキノコを巨大化させ手足を生やしたようなモンスターだ。先の尖った槍を振り回すので油断できない。

まあ動きが鈍速に近いので普通に戦っていたら並の冒険者なら楽勝で倒せる相手だ。しかしトールは排尿で両手が塞がっていて反撃どころかかわすのすら苦心する様相を呈していた。

早く小便終われとトールは念じた。しかし勢いのある小水は止まることの知らない滝のように溢れ出る。相手は弱小モンスターだがなすすべがない。トールは切れ切れになる小便を森の中に撒き散らしながら必死に逃げる。前にジャンプしたりかに歩きで。

「あつ、やっと終わった」

「てい！」

喋ったのはトールにカルトの順だ。

11話

ズボンのチャックを上げ下げし戸惑うトール。その傍らに彼の悲鳴にかけつけて来た銀髪を背中辺りでゴムを使って結った美男子カルトが居た。

彼が右手に黒いもやを宿し、その手でキノコ兵に触れるとそのモンスターは幻であったかのように消失した。その呪文は禁断の属性、闇に関わるものだ。呪文の名は「闇食い」。その闇を纏いし手に触れた者は跡形も無く消え失せる。

禁断とする理由はノルテが多用するためだ。まあ、そのほとんどは強大な力を有する人型のノルテだが。カルトは闇属性の呪文を好んで使う。属性が闇の呪文は強力だが使えば反動として心を病んだり身体に異常をきたす者も居る。

いふなればもろ刃の剣だった。カルトは強くなる必要性があった。その目的のためには突出した力が居る。今のままでは闇呪文の神童とまで持て囃された『あいつ』には敵わない。

カルトは日々の冒険のごとに力を増していた。彼はたゆまぬ努力家であつたし、また優れた素養も持ち合わせていたのだ。カルトはニヒルに笑い右手を腰に当てながら

「トール……残念な奴だ。フッ」

「あつ、今僕のこと鼻で笑った!? 笑ったよね!？」

その後も自尊心を傷つけられたトールのカルトに対する追究は続いた。しかしカルトは笑ってごまかすばかり。

12話

赤、青、黄色、様々な色合いの鳥達が木の枝や樹冠に留まりさえずる森の中。草食動物が寄り添い仲睦まじくつがいで草をはんでいる。平穏を絵に書いたような場面だ。

トールとカルトの喧騒を聞きつけた肩までの黒髪に新雪のように白い肌、大きな瞳のスマレが早足でやって来て

「キャツ！ こら馬鹿トール！ ズボンのチャックを上げなさいよ！ レデイの前で破廉恥よ！」

「え！？ あ！ ごめんスマレちゃん」

慌てたトールはチャックを上げる際に人の頭ぐらいの赤い石につまづき盛大に前のめりに倒れる。鳥達はその音を耳にして空高く舞い上がり飛び去っていった。

草食動物が達も顔を上げ耳をぴくつかせ辺りを窺い歩度を上げて去って行く。トールは赤い髪に付いた葉っぱや土を払いながら立ち上がった。

彼のズボンの社会の窓はしっかりと閉められている。トール達三人はアグマの一件以来修行を重ねいっばしの冒険者となっていた。彼らは何度も冒険し危機を乗り越え成長している。

実力も以前と比べたら比較にならないほど高まっていた。三人共平凡なモンスターなら一蹴できる。

苦難、逆境は人を成長させる。今も三人でパーティーを組んでいた。攻撃的な呪文を得意とするトールとカルトに回復呪文も使いこなすスマレ。バランスも良い。

13話

トール達三人は仲が良いほうだろう。喧嘩もたまにするが。彼らの脇を藪から身を見せた人の赤ちゃんぐらいの体長の野性動物が走り去る。

その生物は口には上を向いた立派な牙が二本あり毛並みは美しい赤色をしていた。名はシノシシ。よく森や山に出没し、そこを生息地にしている。

別名『恋をみのらせる獣』。スミレは別名を知っていたようで

「シノシシだわ！ 私の恋も成就するのかしら？」

熱い眼差しをカルトにおくる彼女は頬を赤くする。しかしカルトはそんな気配を察知することなく銀の長髪をかきあげた。その髪は太陽光を反射し美しく光っている。

トール達は節くれだった木々の隙間を足早に縫うように進んでいく。大人が三人で手を繋いでも囲みきれない一本の樹木には青い二匹の虫が留まり角で相手を追い払おうと対決している。木の上側に居る方が優勢である。

今回の目的はキノコ兵士達の長、キノコ王の退治だった。そのノルテは討伐依頼が布告されて何年も経つのに達成されていなかった。これは意外なことだった。キノコ王は強力なノルテには分類されていないのだから誰かが倒していても不思議ではない。この案件にチャレンジした冒険者達もいるはずだ。しかし吉報はいつこうに聞こえてこないのだ。

14話

キノコ王はこの森の主でたくさんのキノコ兵士達に守られているらしい。キノコ王討伐には時間がかかるかもしれない。

守りが固いと思われる。いったい何体のキノコ兵士と勝負することになるのか定かではない。それに討伐依頼がずっと前から出ているのに解決していないという疑問もある。

何か特殊なスキルをキノコ王が持っているのか罾が仕掛けられているかもしれない。しかもキノコ王は財宝を持っているとのことだ。どれほどの宝か今から期待される。

しばらく木々の間を歩いた三人は大人が二十人で手を繋いでも囲めない大木に出くわした。とても雄々しく立派な木だ。トールは巨大な長寿の木を見上げながら

「僕がお菓子の城の方角を見てくるよ」

トールは木の節や出っ張りを頼りに大木を登っていく。しばらく登ると一番下の枝にたどり着いた。そこからは枝づたいに登って行き木の樹冠に到着した。

そこから方位磁針を片手に辺りを伺うと北の方向にビスケットの壁、苺ケーキの橋、チョコレートの城が見えた。お菓子の城の内外には多数のキノコ兵士の姿があった。キノコ兵士は身長五十センチメートルくらいで全身赤色をしていて手には金属製の槍を持っている。

15話

場所を視認したトールは木から落下しそうになりながら少しずつ降っていく。途中捕まっていた木の枝がポキリと折れ、あわや重篤な状態になりかけた。

冷や汗が彼の背中を伝った。木登りの反対をしている彼はやっとこさ地面に降り立ち方位磁針に従い北に向かった。目的地に向かう際に何体ものキノコ兵士や野性の動物ライズベルに遭遇した。

しかし一体一体確実に仕留め先へ進んでいく。ライズベルは身の丈二メートルはある肉食動物で青い体毛を全身に持ち鋭い爪が武器だ。

そいつは並のノルテよりも凶暴で厄介な相手であった。トールが尖った長い爪で切り裂かれそうになったがスミレとカルトのフォロ―で難を逃れた。

「嚴重な警備ね……橋は下りてるけど。カルト君どう思う？」

「スミレちゃん、僕にも聞いて……」

スミレはトールの発言を軽くスルーした。彼の反応を一言でいうならショックで口を大きく開け目を見開き『ガーン』といったところだ。かなり動揺しうなだれている。

容姿端麗なスミレは頬を赤くしながらカルトに尋ねた。言葉に緊張している様子が出ていた。なんかもじもじしているし。

トール達はお菓子の城が見える森の藪の間から城の様子を伺っていた。

16話

カルトは女殺しな微笑を称え「うん」とうなづくと続けた。

「俺達の実力なら正面突破も可能だと思う……相手は非力なキノコ兵士だけみたいだしな」

「正面から行くの？ 僕恐いんだけど……」

意見したトールだったがカルトの作戦が採用された。三人はおやつで出来た城に襲撃をしかけた。

トールは右手に魔力を集め風の魔力を集約した。すると右手の全ての指の先に五つの小さな渦が出来た。渦神という呪文だった。

城外でバトルが勃発した。トール達対キノコ兵士。その渦が赤いキノコ兵士に触れると風の刃によりキノコ兵士は切り刻まれ

「グエー！」

トールは次々と渦神でキノコ兵士を屠る。トールに向け彼の背後からキノコ兵士の一匹が槍を突いた。しかしその槍はトールには届かずスミレの手で押さえられる。

そしてスミレの強化魔法で威力を上げたパンチがトールを彼の背後から襲ったキノコ兵士を打ち吹っ飛んだ。トールがカルトを一瞥すると闇食いで一回り大きなキノコ兵士を倒すところだった。

大柄で体格の立派なキノコ兵士はカルトの右手の突きが触れると姿を消した。どうやらカルトが倒したキノコ兵士が指揮官だったよう。数十のキノコ兵士達は慌てて遁走した。

17話

トール達はイチゴケーキの橋を渡る時、ケーキの生クリームをすくって口に入れてみた。その感想はとても甘く奥深い味わいだった。トールは夢中になって食した。彼の口の周りにたくさんのクリームこびりついている。

「こら、トール行くわよ！」

口のふちに生クリームをいくつも付けたトールは口を服で拭い、慌ててスマレとカルトの後を追った。城内に繋がるビスケットの門をカルトは押し開いた。

鍵はかかっておらず無防備にもほどがあった。城内の壁には鉄製の金具が付けられその金具の中でろうそくが燃えている。

また天窓から陽光が差し込み明るい。あの窓ガラスは何で出来ているのだろうか。水飴かな。トール達は一階を探索していると宝物庫を見つけた。その部屋には金銀財宝がうずたかく山のように積まれている。

「やったあ！ 僕達これで大金持ちだね。さあ、魔袋に入れて帰ろう」

「待て、トール！」

「へ？」

カルトの静止の声を聞かずトールは金びかの鎧に触れた。すると城中からけたたましいサイレンのような音が鳴り響く。警報だろう。トール達の前に突如人型で緑色の肌にコウモリのようなたくまし

い羽が背中に生えたノルテが現れた。

18話

とても険しい顔でトール達を睥睨したそのノルテは

「私はルージン。人間か。よくここまで来れたな。だがここでおまえ達の生涯は終わりだ。用心棒としてお前達を排除する」

カルトは一瞬で自分達に相対するノルテの実力を理解した。厳しい戦いになると。ルージンは羽ばたき飛行し体の周りに赤々とした炎を纏うと体当たりをかましてきた。

その一撃はどんくさいトールに追突しトールを吹き飛ばす。彼は吹っ飛び壁にひどく打ち当たる。トールの近くにあった金貨の山がザーと崩れた。トールはなんとか体を起こそうとして

「痛たた……」

しかしトールはルージンの攻めのダメージにより立ち上がれない宙に漂うルージンに向かって銀色の長髪のカルトが走る。彼の右手には闇に被われていた。強化魔法で脚力を上げジャンプしその手をルージンに接触させる。

カルトは勝利を確信しニヤリと笑った。しかし結果は彼の予想に反していた。

「小僧の分際で闇食いを使うとは……しかし相手が悪かったな」

ルージンは黒いもやに囲まれた手でカルトの右手（闇食い状態）を握っていた。ルージンも闇食いを使いカルトの呪文を防いだのだ。ルージンは右足でカルトを蹴り飛ばした。しかもただの蹴りではなく無属性の魔法で強化された一発だった。

19話

あまりの威力にカルトは宙を飛び何度も地面に体のいたるところをぶつけた。宝石があらわれた鎧や銀色のネックレス等がうずたかく積まれた山に背中をぶつけようやく止まった。

金色の王冠が宝物の小山から落下しカルトの頭の上に乗った。まるで美男子なうら若い王子様のようだ。カルトはピクリともしない。ルージンの強さは圧倒的だった。十人並みのノルテではない。

ルージンはトール達が仕留めてきたノルテの範疇を大きく上回っていた。まるで希代の怪物アグマを思わせる実力者である。スマレが走り寄り地面に足をつけた強靱なルージンに強化魔法で破壊力を上げたパンチを繰り出した。

その一撃は金属製の鎧にクレーターを作る程の力を秘めていた。スマレの放った一発はルージンの右頬を打った。しかしルージンはニヒルに微笑み平然としている。続いて強化された蹴りをルージンの右脇腹に決めるスマレ。

しかしルージンは微動だにしない。

「女よ、無駄だ。……楽にしてやろう……」

ルージンは暴れるスマレの頭を掴み宙に持ち上げた。ギリギリとルージンの握力でスマレの小さな頭部が締め付けられる。彼女は苦痛を表情に表し

「痛い！」

「女よ、首を撥ねてやる。楽になるぞ」

20話

ルージンは左手でスマイレの頭を掴んだまま右手に炎を宿し振る――

（駄目だ！ このままじゃスマイレちゃんが殺されちゃう！ 僕にも
つと力があれば……力があれば！！ 力が欲しい！！！！）

「ガーーーーー！！」

と思考しトールは吠えた。獣のような咆哮だった。その声にルージンの右手がスマイレの首に触れる寸前に止まる。纏っていた炎も消え去る。トールを目を細めて凝視するルージン。ルージンは啞然としスマイレを手放し（地べたに倒れ込むスマイレ）

「ま、まさか……この独特な力の波動は神人！？」

トールの顔や全身の皮膚から赤い毛が凄まじいスピードで生えてくる。そして口には牙が生え、指が膨脹し爪が鋭くなった。トールは豹変しまるで虎のような顔をしている。

「ト、トール？」

地面に接地し尻餅をついたスマイレはトールの名を呼んだ。驚きと畏怖の混ざった声だった。スマイレの体がトールを見ていると震える。トールの姿は人型の獣へと姿を変えた。彼は首を曲げコキツと鳴らすと地面を蹴った。目にも留まらぬ速さだ。ルージンはまがまがしい気配に体を後ろに反らした。

「グワッ！」

ルージンの右腕の肘から先が消えた。血しぶきが上がり顔色を悪くするルージン。

21話

いや正確に言うつと変貌を遂げたトールの牙に食いちぎられたのだ。尋常じゃない速さだった。

「グルル！」

トールはくわえていたルージンの右腕の肉を食らった。赤い血を口から垂らしながら。そして肉を嚥下する。おぞましい光景だった。毛に全身を被われたトールはルージンの腕を血を滴らせながら食っていた。

スミレは呆然としルージンは悲痛な表情を浮かべていた。

「ガルル！」

トールは四本足（手を前足にして）で駆けた。目では追えないスピードだ。ルージンは憤慨しながら

「ク！ 神人のハーフか？ 小僧。その虎のような姿は赤虎」

トールの放った回し蹴りは空中に避難し、かわしたはずのルージンに的確に命中した。ルージンは吹っ飛び宝物庫の壁にめりこんだ。右腕から大量の血を流しながら。ルージンは身動きしない。

死んだのだろうか。神人と化したトールはジャンプし、さらにルージンに攻撃を加える。一発、二発、三発、四発とパンチを打ち込む。

「トール」とスミレ。

ルージンは壁からずり落ち死んだ。しかし執拗に攻めを止めない
トール。ルージンの右足を引きちぎり、首をもぎ取り左足を食いち
ぎり左手を爪で切り裂いた。ルージンは無惨な姿になった。

22話

「トール！　お願い元に戻って！」

悲しそうな表情を浮かべる美しい顔立ちのスマレは哀願した。

「ガルルー！」

トールは跳躍しスマレに近づき首を撥ね――

「トール！」

「はっ！　ス、スマレちゃん」

スマレを殺す寸前にトールはようやく意識を取り戻した。戸惑うトール。自身の体の変わりかたに動揺する。

「これが僕！？　どうなってるんだ？」

「よかった！　いつものトールに戻ったのね！」

スマレの声には喜びが混じっていた。スマレの頬を一筋の涙が伝う。トールはふらついて膝を地面につき意識を失った。

「トール……トール！　……トール！」

「はっ！　あ、スマレちゃん……おはよう」

トールはスマレのひざ枕の上で目覚めた。体の節々かきしみ痛い

とトールは思った。場所は変わらずお菓子之城の宝物庫内だった。

「トール起きたか？ まったく心配かけさせやがって」

カルトがクールに感情をあまり出さずに素っ気なく言った。宝物庫内には金、銀、財宝は無くなっていた。空間増幅魔法がかかった魔袋に詰めたのだろう。

「トール大丈夫？」

スマレの優しい声にトールはますます彼女を好きになった。

23話

スミレはとても温かい人だとトールは感じた。まるで太陽のようだ。

「スミレちゃんありがとう。あ、体も元に戻ってる」

「ええ、さつき人の姿に戻ったの。トール、あなたは伝説の神人なの？」

「神人？ いや分からないよ。小さいときに孤児院の前に捨てられてたっけしか聞いてないよ。母さんと思われる人も近くで傷だらけで死んでたっけ……」

スミレは口を右手で押さえ

「ごめんなさい。悲しいこと思い出させちゃったわね」

トールはニコリと微笑むと

「いいよ。もう、昔のことだし」

「トール、スミレ。キノコ兵の王を倒しに行くぞ！」

「あ、うん」とスミレ。

「分かった」とトール。

もう少しひざ枕の上にいたかったが不承不承にトールは立ち上が

った。城の正門の向かいにある甘ったるい臭いを漂わせる階段を駆け登るトール達。

三人の前に三匹の赤い外観のキノコ兵が立ちはだかったが一掃した。そして豪華なお菓子の扉を押し開くトール。その部屋は金色のタペストリーが壁にかかり赤い色の絨毯が敷かれ二段高いところに玉座があった。

金色の王冠を被った大きなキノコに目や鼻、口、手足がある王様が玉座を陣取っていた。

「勝負だ！」

トール達は身構える。するとキノコの王様は王冠を脱ぐと土下座して

「ルージンに勝ったあなた達に対して勝機はありません。勘弁してください」

キノコの王様は王冠を脱ぐとキノコ兵となんら変わらなかった。トール達はキノコ王をギルドの関係者に引き渡した。

24話

「泥棒王ってなんかカッコイイ二つ名だね？ カルト君」

トールがカルトの背後から質問を投げかける。今は森の中。節くれだった木々の間を淡々と進んでいくトール達三人。足元に生えた青い野花に黄色い蝶が留まり蜜を吸いながら羽休めしている。

トール達の目的地は人気の無いスミール洞窟。カルトは足を止めた。カルトに続くトールとスミレもストップする。

「トール、泥棒にかわりはないぞ…… モンスターだな」

カルトが樹冠を見上げるとトール達もそれに従った。木々の枝を伝いモンスターが現れた。

名前はムカーデ。何十本もの足を持ち鋭利な牙で小動物を仕留める。長さ二メートル程の凶暴なモンスターだ。ムカーデは歯をカチカチ鳴らしながらトール達を威嚇しているようだ。

木をガサガサと揺らしながらカルトに猛スピードで接近し口を開き四本の牙で噛み付き――

「フツ、甘いな」

カルトはニヒルな笑みを浮かべムカーデを見つめる。彼の瞳は真っ黒く染まっている。白い部分は全くない。カルトの得意とする呪文『闇目』だった。

その呪文はその黒い瞳で見つめた相手の視力を一分間奪つ。

「さすがカルト君！」

とスミレが嬉しそうにカルトを褒める。彼女の頬は微かにピンク色に変わっている。

25話

スミレはカルトを好いていた。小学生の時、気が弱く虐められていたのを救ってくれたのがクラスでリーダー的な存在のカルトだった。

「闇食い……っ！」

カルトが右手に暗いもやを宿らした時、藪からもう一匹のムカーデが現れカルトの右腕の二の腕辺りに食らいついた。

カルトが苦痛に表情を歪める。しかし右手を反射的に二匹目のムカーデにくつつける。

「グギヤー!!」

新参者のムカーデは苦悶し暴れた。何故ならカルトの闇食いで頭部を失ったからだ。激痛を味わったことだろう。

「渦神！」

トールが木の枝を跳び伝いもう一匹のムカーデを小さい渦が指先で五つ巻く右手をぶつける。渦神をまともにくらいムカーデは顔を何度も切り裂かれ地面に落ち赤い血液を流しながら悶絶した。

「グゲゲー！」

地面に横たわる二匹のムカーデの背中に魔法で強化した重いパンチをめりこませるスミレ。遂に仕留めたのだ。

「カルト君手を出して」

ムカード二匹の死骸を横目にカルトが流血している四つの小さな穴がある右手を差し出す。するとスミレは目をつむり両手を傷口に当て

「治水！」

スミレの両手から緑色の液体がカルトの腕にかかった。ジュツと音がしたかと思うとみるみる止血され穴が塞がっていく。

26話

スミレの使用した呪文、それは傷を治す呪文だった。彼女は手を下ろすと

「これで大丈夫」

「悪いなスミレ、ありがとう」

素っ気ないカルトのお礼の言葉を受け取る微笑みをたたえる目鼻立ちが整ったスミレ。本音で嬉しいのだろう。温かい笑顔はスミレのカルトに対する好意が表れている。スミレは言葉では言い表せない程カルトを好いていた。

「あ、洞窟だよ！ スミレちゃん」

とげとげな髪をかきながらツールが呟いた。それに対し疑問を口にするスミレ。

「おかしいわね、スミール洞窟に着くにはもっと時間がかかるはずなんだけど」

その洞窟に潜入していく三人。洞窟の中にはスチームというこの近辺で採れる安価な宝石が地面や壁、天井にあり発光しているため明るい。足音を起さないように慎重に進むツール達。

「思っていたより明るいね、カルト君」

トールの声は小さめだったがその言葉は洞窟内に木霊した。

「シッ！ 静かにな。トール」

足元には雑食性の茶色い昆虫ゴキブリがわんさかいる。洞窟の天井にはコムリと言われる夜行性で体長一メートルぐらいのモンスターが頭を下にして居る。

コムリはまだ昼間のため眠っていて襲ってはこない。

27話

トールが一步一步進んでいく。足音を起てないように。すると壁に出くわした。茶色い自然の壁だ。行き止まりかなと思案するトールだったがカルトが彼の腕を引きながら

「バカ、モンスターだ。ゴキブリクインだ！」

「キシヤーー!!」

茶色い肌に六本の足を持ち鋭い牙を持っていて体長二メートル程のゴキブリクインは機嫌が悪いようだ。盛大に音を起て威嚇してくる。さらに前あしで引っかいてきた。

トールは躓き転倒した。ゴキブリクインからのダメージ受けることを覚悟し目をつむる。しかし痛みはいっこうにやってこない。目を開けてみるとカルトが両手から黒いもやを放出しながら闇食いで防いでいた。

「グゲルー!!」

前足の先を負傷したゴキブリクインはじたばた暴れ悲鳴を上げる。痛みがあるのだろう。人間でいうと腕先が無くなったのと同じことだし。

「てい！」

スミレが強化魔法で破壊力を上げた蹴りを放ちゴキブリクインの目を攻撃した。潰れる大きな目。そのノルテは新たなダメージをくらい勝率が低いとふんだのか遁走した。

「なんとかあったわね……トールあなた鈍感なのね」

残念な人を見るような視線をトールに投げかけるスミレ。

28話

「まあ、無事にすんだしいじゃないか……フッ」

カルトはますます怒りがこみあげてくるのがわかった。自分を孤児にし父、母の命をさんだつた姉ナリス。何とか復讐したいと切に願っていた。しかしルーシア国の神童と謳われていた姉には力が及ばないことを理解している。

「力が……もつと欲しい」

「うん？ 何、カルト君？」

カルトの独白にトールが反応した。

「いや、何でもない……フッ」

洞窟は奥に行くほど広くなっていた。壁や地面には巨大なスチームがむき出しの状態で光っていた。これぐらいのサイズなら高値で売れるのではないだろうか。トール達が進んでいると十字路に出くわした。前に右に左に道がある。今来た道の壁に渦神で印をつけ、どの道に行くか相談する三人。

「どうしようか……カルト君どう思う？」

「何とも言えないな……左の道からしらみつぶしに行こう」

早速左の道をたどっていく三人。ゴキブリがかさかさと足元をはいまわる音がする。スミレはそれが気持ち悪いのが歩調がスロー

だ。

「ハズレだな……」

最初の道は行き止まりだった。残念がる三人。十字路に足早に戻り真ん中にある道を歩いていく。

29話

それからはモンスターには出くわさなかった。辺りを静寂が包んでいる。すると声が奥からした。人影もある。一人のようだ。

「あはは！ 俺は大金持ちだぜ！ スバリスの屋敷は金めの物ばかり！ 最高だ！ 人間を強く育てる変人ノルテ万歳！ クハハハッ！」

「おい、スバリスとやらは強いのか？」

カルトが質問した。ツール達の姿を見た黒い長袖のシャツに黒い皮のズボンを履いた男は仰天した。

「なんだなんだ、おい。も、もしかしておまえ達の狙いは俺か？」

カルトは繰り返した。

「アツシュだな？ 質問だ。スバリスは強いのか？」

カルトの真面目な顔付きに黒い衣装の茶髪の男性、泥棒王アツシユは答えた。

「ああ、ああ。強いともさ。だが俺には消失の呪文がある。俺の姿は誰も捕らえられない。ムフフー！ 美少女発見！ 触りてー！」

泥棒の頂点にいるアツシユは好色な目を容姿端麗なスミレに向けた。

「人体消失！」

アッシュは言葉を発すると姿が雲散霧消した。気配も全くない。アッシュが居た洞穴の広い空間には金貨の山がいくつもあり金色の鎧や宝剣も散乱している。

全部どこからか掠め取ってきたのだろう。これだけ財宝があれば人生遊んで暮らせる。

30話

「ムフフ！俺はどこにいますのしょうか？」

スケベ心丸出しの泥棒王は真っ先に大きな目に肩までの黒髪のスミレに接近した。そしてスミレの形の良いお尻を触ろうと手を伸ばした。

「ムフフ！」

「そこ！」

「ゲゲ！」

スミレが声の発生源を探知し強化魔法で攻撃力を四倍に増したパンチがアッシュの右頬に炸裂した。彼は蛙が踏み潰された際に出そうな断末魔を口にした。

アッシュは吹っ飛び壁に背中をしこたまぶつけた。アッシュは始めはボヤーっと次いでヌツと姿を現した。完全にのびている。スミレの一発KOで寸劇のようだった。

アッシュをギルドに連行した後、宿屋の晚餐のテーブルでカルトは話した。

「トール、スミレ……話があるんだが」

笑顔をカルトに向けスパゲティを巻き取る動作を止めるスミレは

「え、なにになに？」

興味津々といった彼女の表情は次の一言で凍り付いた。

「おまえ達と別行動をとることにする」

「え？　なんで？　私達のこと嫌いになったの？」

「違う、俺は強くなりたいんだ……スバリスの元に行く」

カルトの発言にトールは啞然とした様子だったが口を挟んだ。

「え？　いつから行くの？」

「……この話が終わったらだ……フッ」

31話

カルトの答えに絶句するトールとスミレ。動揺を隠しきれない様
が顔の表情にでている。

「カルト君と別れるなんて考えたくないよ!」

「決めたことだトール。気持ちは嬉しい。ということだ。俺は強く
ならないといけないんだ。奴を殺すために……」

「奴って?」

トールの問いかけ淡々と答える美少年カルト。

「俺の姉だ。……父母の仇なんだ。以上だ。今までありがとう二人
とも。楽しかったぜ……フツ」

食事を中断し席を立ち足早にツカツカと去っていくカルトにスミ
レが言葉を紡いだ。

「カ、カルト君。私も行く」

「駄目だ……」

カルトは即答だった。足を止めるカルト。銀色の髪の揺れが止ま
る。

「……危険な目にはあわせられない」

スミレは喉を詰まらせ眦に涙をたたえながら

「わ、私カルト君のことが好き……」

「スミレ、俺は人を幸せには出来ない。じゃあな」

また足を進め宿屋の入口の扉を開き闇夜の中に姿を消したカルト。
スミレは俯き悲しそうに泣いている。

「スミレちゃん……」

トールは大好きなスミレが心配で彼女を見つめていた。僕には何も出来ない歯をくいしばった。

32話

太陽が東から姿を見せ暗い帳を打ち消し始めた。空の支配者が黄色い月から赤い太陽へと変化する。太陽はどこまでも明るく人々に希望を与える象徴のようだ。

ベットに横たわりながらトールは窓から空模様を見ていた。今日は快晴のようで雲一つ無い。だけどトールの心には雨雲が立ち込めたかのようでふさぎ込んでいた。理由はもちろん昨夜別れたカルトのことだ。

またスマレのことも心配していた。少しは元気が出たかなと。そんな事を考えていると鶏が高い声音で鳴いた。投宿している宿屋では鶏は飼育していないので近所さんが飼っているのだろう。

トールはまだ早朝だが起きることにした。壁にかかった時計に目をやると五時十分だった。トールとスマレの居るルーシア国の首都ベルガジの朝は早い。

街をトールが長袖長ズボン姿でランニングしているともう開店の準備をする店主や犬の散歩をする人々が目に留まる程だ。トールはすれ違う人々に「おはようございます」と挨拶しながら街路を走っていく。街を一周する予定だった。商店街を走っていると魚屋の前で一悶着起きていた。トールがその喧騒がするところと近づくと仄聞いた。

「こら、猫族の娘っ子！ よくもおいらんちの魚を無断で食べやがったな！ 兵士に頼んで牢屋にぶち込んでやる！」

33話

「なんだと！？ 常習犯になるってか？」

猫族の十五、六歳ぐらいの頭の頂きに二つの耳がある女の子。彼女の手を額にタオルを巻いた魚屋のおじさんが握りながら怒っている。

凄い剣幕だ。多少圧倒されながらも女の子が不憫に思ったタオルが割って入った。

「すみません。弁償します。いくらですか？」

魚屋のおじさんはつり上がった目をツールに向けうさん臭そうにねめつけながら

「兄ちゃん、この子の知り合いかい？」

「いえ、そうではないですけど……僕が弁償しようかな……と」

猫族（人と耳の位置が違うだけ）の女の子はパーッと笑顔になり頭の上にある小さい耳がパタパタと動いている。

とても端正な顔立ちをした猫族の女の子だった。体型はスレンダーだ。

魚屋の主は息をまいた。

「駄目だ！ 駄目だ！ 甘やかしちゃいけない！ 人のためにならねえ！ ここは牢屋で反省すべきだ！」

猫族の女の子は魚屋の店主にあっかんべーをした。魚屋の周りに

ちよつとした人ばかりが出来始めた。こんな朝早くから何事だろう
と思ったのだろう。確かに気になる。トールは機転をきかせ

「これ以上騒いだら店の評判が落ちるかもしれませんよ？」

34話

「うぐつ。うぐぐう……」

魚屋の店長は不承不承に猫族の女の子を解放した。すると女の子はトールに抱き着いた。彼女からはとても心地良い香炉のような香りがした。

「ありがとう、お兄さん！ 恩は体で返すね」

「え！？ 体！？」

顔どころか耳まで赤くするトール。少し想像してしまったようだ。

「私はミーニャだよ。」

人垣をかきわけ住宅街を歩くミーニャとトール。並んで歩く二人はまるで眷属のようだ。

「二人はまるで恋人のよう！」

「え！？ なに？」

戸惑いを顔に出すトール。彼はそれとなくミーニャに質問する。

「家族とかはいないの？」

ミーニャは悲しそうな表情で頭の上の耳を寝かせ

「居ないよ……独り立ちしたんだもん。でもお金無くなっちゃて…

…つい盗みをはたらいちゃったの」

「そうなんだ」

「お兄さん名前は？」

「あ、そうだね。忘れてた。僕はトール」

「トール。私を雇ってよ。お礼は体で返すから」

「えー！？ いや体で返すて……。お礼はいいよ。行くところないならついてきなよ。宿屋だけどね」

「わーい！ トール大好き！」

ミーニヤは背伸びしてトールの右頬にチュッと口づけした。

34話（後書き）

あけましておめでとぅございますm（——）m

本年もよろしく願います！

後書きまで読んでくださりありがとうございます。

35話

「ぶふお!？」

初めてされたキスに動転し鼻血を垂らし転倒するトール。

+

「で連れて来ちゃったと？」

スミレの険のある口調にたじろぐトール。スミレは寝不足でだるう目元にくまが出来ていた。きつとカルトのことを思っで寝付けなかったのだろう。

ここは宿屋のスミレの部屋。あまり物が置かれていない簡素な部屋だ。

「ごめんなさい。スミレちゃん……」

「ご立腹だったスミレは「ハア」と息を吐き

「仕方ないわね。そのかわり働いてもらっわよ。戦いは出来るの？」

ミーニヤは小さな胸を張って宣誓した。

「恩は体で返すよ」

「いや、わたしはそっちに興味ないわよ……。ガールズラブ？」

「違うよ。聞いたよ。スミレ。二人は冒険者なんでしょう。私戦闘

得意だから肉体を使って敵を倒して報いるってことだよ」

安心したスマレとちよつとがっかり顔なツール。スマレは述べた。

「分かったわ。じゃあミーニヤ、これから私達は仲間よ。よろしくね」

スマレとミーニヤは笑顔で固い握手をかわした。俯いて思いつめた顔のツールが顔を上げ意見した。

「スマレちゃん、ミーニヤ。僕行きたいところがあるんだけど……」

36話

+

カルトは草原を歩いていった。背中辺りまである銀髪を揺らしながら。彼が探しているのはノルテの一人スバリス。そいつは人を育てるのが楽しみだという。

噂では才能ある子供をさらひ魔法教育を施すのだそうだ。強くなりたい。そして親の仇をとるんだとカルトは思った。そして膝までの高さの緑色の草を踏み分け進む。

力を手に入れるために。奴を殺すために。ああ憎い。なんと憎たらしいんだろう。カルトは美しい顔を歪ませながら草地を歩む。

+

トール達はルーシア国の南部にある赤虎の里を目指し歩みを進めていた。しかし中々進まない。息もしにくい。何故ならここはスーザン山。この山を越えなければ目的地にはたどり着けない。

「ハーハー」と荒い息をしながらトール達三人は坂を登る。かなりきつい傾斜だ。先頭に行くトールは立ち止まった。

「トールどうしたの？」

スマレの問い掛けにトールは

「スマレちゃんの出番だよ！」

「え、容姿端麗な私の出番というと絵のモデルとかかしら？」

トールは苦笑し道を塞いでいる三つの大岩を指差して

「いや、えと、岩を粉碎してほしいんだけど……」

ギロリとスマレがトールを睨む。「ヒー！」とトール。

37話

カワイイ容姿が台なしになっていることは綴っておこう。かなりきつく険のある表情だ。

「わかったわよ」

スミレは山肌にある真ん中の大岩に歩み寄り唱えた。

「スクイズ！」

スミレの右腕が強化魔法で白く輝く。そして渾身の一撃が大岩を直撃した。その岩は小さなけらに変わった。ばらばらになった大岩はほとんど吹っ飛んでいた。道が出来たので大岩に挟まれた道に歩を進める三人。

しばらく歩くと所々板が抜け落ちたぼろい橋に出くわした。トールは

「先頭は誰にする？」

女性陣二人はトールをじーっと見ていた。トールは渋々に

「はいはい、行きますよーだ！」

一步一步進んでいくトール達。トールは五歩目の板が踏むと抜け落ちた。そしてトールも下方に微かに見える曲がりくねった小川に転落ー！。

「よいしょっと！ 危ないよトール」

間一髪のところミニーがトールの右手を両手で掴んだ。ミニーとスミレに引き上げられたトールは戦々恐々としながら吊橋を渡った。トールはトラウマになるくらい恐怖していた。橋を渡り終えるとそこから土と岩の道を歩く。

すると白銀の鎧を着込んだ整った容姿の男がストレッチ運動していた。

38話

今は深呼吸を「スーハー」としている。トール達に気付くとニッコリと微笑み言葉を口にした。

「俺様はかの有名な勇者カーノンだ！ 今は訳あって盗賊に身をやつしているのだ。さあ食べ物によこせ！ さもなくば……」

トールは息を飲み

「さもなくば……」

「……俺の考えた難しいクイズにチャレンジするか選びな」

ガクツとするトール達三人。このうさん臭い勇者はアホなのかそれともアホなのか。

大きなパンパンに膨れた鞆をせおわされている弱気なトールは

「じゃあ難しいクイズで……」

顔立ちだけは男前なカーノンは言葉を紡いだ。

「ではいくぞ……」

ゴクリと唾を飲むトールと白けている女性陣。

「……いつも自分の真似をしてストーカーしてくるのは何？」

トールは即答した。

「え……えと影?……」

「……うぐ! うぐぐ! 正解だよクソヤロー!」

カーノンはそう言い残すと涙と鼻水を盛大に垂らしながら疾走して姿を消した。

「なんなのよあいつは……」

残念な人を見る目でスマレはカーノンを見送った。滅多にいないほど残念な勇者だ。ていうか本当にあんなのが勇者なのであるうか。疑問が山積だ。

39話

「やっと楽になったわね、ミーニャ」

「そうだね。スマレ。山登りはつらいね」

「お、お二人さん……休憩してよろしいでしょうか？」

下り坂を下りながらトールは嘆願した。トールは荷物を背負っていたためかなりきつかったようだ。

「仕方ないわね。十分だけよ」

「はい、どうもです。スマレちゃん」

「赤虎の里ってどんな所なのスマレ」とミーニャ。

「遺跡みたいになってるって聞いたわよ」

手頃な石に腰掛け喋るミーニャとスマレ。トールは水筒を鞆から取り出し水をあおっている三杯ほど。体力のあまり無いトールにとってかなりの苦行だったことこの上ない。

十

銀髪的美少年カルト。彼の容姿は百人が百人とも美形だというほど整っていた。それほどまでに美しい造りだったのだ。今は笑顔を顔にたたえている。何故なら目的地が定まったからだ。

「スバリスは北に居る……。フッフッ」

今カルトが居る場所は森。背丈の高い木々が生い茂っていて空は少ししか見えない。カルトの足元には三匹のムカーデが頭部を失って転がっている。

ピクピクと痙攣しているムカーデもいる。カルトは徐々に強さを増していくようだ。

+

「や、やっと着いたー！」

40話

トールが喜びの声を上げ荷物を下ろし地べたに腰掛けた。

「こら馬鹿トール、目的地に着いていきなり休憩して……」

「はいはい、わかりましたよーだ」

トールは渋々石造りの家の跡地を散策し始めた。まだ形が残っている建物もあった。しかし人気は無い。やはり赤虎は滅んでしまったのだろうか。

トールが半壊している家の中を探索していると一冊のノートを見つけた。もう変色して黄色くなっている。ペラペラとめくってみるトール。そこには『この街はおしまいだ。奴らが来た。憎々しい奴らが……。恨めしい奴らは我々を滅ぼさねば気がすまないのか……黄龍め』と書かれていた。

「スミレちゃん！ ミーニャ！」

「誰じゃ！？ 盗っ人か？」

トールの声に気付いた白髪混じりの老人が杖をつきながら立っていた。相当高齢だと思われる。足も僅かに震えているようだ。トールは思案しながら述べた。

「僕は……その赤虎について知りたくて……」

老人は驚いたように目を見開き

「お前……赤虎の臭いがするな」

「え、わかるんですか？　なんでですか？」

と動揺するトール。

「分かる。なぜなら……私も赤虎のハーフだからじゃ」

41話

「!!!??」

動揺し目をパチパチと開閉するトール。すると離れて物色していたスミレとミーニヤが足早に集まってきた。女性陣二人は老人を怪しんでいるようだ。

こんな遺跡のような廃墟に人が居るなんて普通考えられないし、当然だろう。猫耳をピコピコさせながらミーニヤが口を開いた。

「おじさんは人なの?」

失礼極まりない質問だ。しかし老人は気を悪くした様子もなくミーニヤ達を振り返って視界に入れ回答した。

「人であり赤虎でもある。少年よそなたの名前はなんだ?」

「えと、トールです」

「トール……ミルニの子か……生きておったか……なんと嬉しいことじゃ。トールや、わしはルンテ、そなたの祖父で君の母の父じゃ」

「え!?! おじいちゃん?」

ルンテはしわしわの顔を喜びに歪ませ、トールに歩み寄りトールの右手を両手で優しく握った。小さな手だとトールは思った。しかしトールを自然と安心させた。

トントンと豪華な造りの扉をノックするカルト。彼の心は喜びに震えていた。ここで俺は強くなれる。奴を殺せる程に。もっと実力をつけたい。しかし反応が無い。

カルトはドアノブを回した。しかし鍵がかかっているようだ。

42話

カルトは不意にこのドアを破壊したいという衝動にかられた。彼の右手を包むように黒い炎のようなものが出現する。まるで黒い陽炎のように。

カルトはまがましい気配を背後から感じた。顔を振り向けながらあまりの殺気に死を覚悟するカルト。彼の美しい顔が歪んで玉のような汗をかいている。

「小僧、何様だ？ 門を飛び越え人の敷地に強引に侵入するとわ」

カルトの背後に居たのは長身のノルテだ。そいつは肩幅も広く腕も太い。肌の色は緑色で赤い瞳をしている。こいつこそが殺気の正体だった。

カルトはぼそぼそと口走る。

「あんたがスバリスか？」

「そうだ。小僧……闇食いは俺と戦ったためか？」

ハッとしたカルトは右手から暗い闇を消した。するとスバリスの殺意も消失した。カルトは髪をかきあげながら

「あんたに弟子入りしたいんだ」

+

トール達三人は赤虎の遺跡のすぐ東にあるルナル村に来ていた。ここはルンテの家の客間。トール達三人は並んでソファアに座って

いた。彼らの目の前のテーブルには紅茶とケーキが置かれている。
トールは命の危機にさらされた時に赤虎に変身したことをルンテに話した。

「そうか……変身出来たか。……じゃが意識は保てたか？」

43話

心配な様子でルンテは言葉を投げかけた。それにトールは首を振って答えた。

「そうじゃろう……ハーフの者は修業せねば意識を奪われてしまうのじゃ」

「え、つまり修業したら自由に変身したり、自分の意識を保てるんですか？」

ルンテはうなづいた。トールは修業をしたいと申し出た。

「いいじゃろう……わしがそなたを鍛練してやろう。じゃが今日はもう遅い。二階の部屋を好きに使うといい。ちやうど三部屋あり、空いておるしな」

「あ、ありがとうございます」

「孫のためじゃ。礼などいらんわ」

トールはルンテお礼を言いスミレ達に問いかけた。

「スミレちゃん達はどうする？」

「私達も残るわ。あなた一人じゃ心配だしね」

「私もトールと一緒に居る。体で恩を返さなきゃだし」

「そついつの、勘違いするから止めてよね」

会話の順はトール、スミレ、ミーニャ、トールだ。トールはミーニャの発言にまたもや耳まで赤くした。一階の窓から外を見ると空が茜色に染まっていて美しかった。

もうすぐ夜がやってくる。トール達はルンテの奥さんが作ったシチューとパンをリビングルームのテーブルで食した。シチューは味わい深く少し甘かった。パンは少々硬かった。

44話

「ごちそうさまでした。ミラノさん、ルンテさん」

とトール。ミラノさんはルンテさんの奥さんだ。

「孫と食事が出来るとはなんと嬉しいことか、そなたの母のミルニは元気か？」

そのルンテの発言に表情を固くするトール。彼は悲痛な声音で答えた。

「母は死にました……殺されたみたいです……」

「そうかわしの娘は死んだか……クツ、悲しや。きっと黄龍達の仕業じゃろう。無念じゃ……」

トールは憤りを感じ表情を崩し眉を下げ悲しそうな顔つきのルンテに尋ねた。

「なぜ黄龍は赤虎を殺そうとするんですか？」

「そうじゃのう……我々赤虎は黄龍達と数百年前より最強の種族の名を奪い合ってきた。つまり殺しあいをしてきたのじゃ。この二種族間には多大な恨みが根強く残っておるのじゃ。数が多い黄龍の一族は赤虎を殺害してまわった。……赤虎の生き残りは極めて少ないじゃろうのう」

トール達はルンテの話を聞き事情を理解した。その後数分話した

後トール達は「おやすみなさい」と挨拶し二階の部屋に散った。

階段から近い順にトール、ミーニャ、スミレの部屋だった。ルンテの家屋は木造作りの家だった。木目も所々に散見する。トールの入室した部屋にはベットに机にタンスがあった。窓を覆い隠すのは赤い花柄のカーテンだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9467y/>

トールの直行

2012年1月11日10時52分発行